

2018.8  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

8号

第40巻  
No.349



エビスグサ *Cassia obtusifolia* L. (マメ科 *Leguminosae*)

## 生 薬

ケツメイシ（決明子） 秋、果実が成熟し茶褐色になってから株ごと抜き取り、ハサ掛けして乾燥し、種子を叩き出す。風選して煩雑物を取り除き、再び陽乾する。顆粒が均一で、充実し、黄褐色なものが良品。

## 成 分

アントラキノン誘導体：emodin, obtusifolin, obtusin, chryso-obtusin, aurantio-obtusin およびその配糖体、ナフトピロン誘導体：rubrofusarin, norrubrofusarin, cassiaside B<sub>2</sub>, C<sub>2</sub>、イソクマリン：troalactone 等。

## 効 能

緩下、整腸、健胃、強壯、利尿薬として、便秘、腹部膨満整腸に用いる。眼病や目の疲れ、充血にも用いる。漢方処方に配合される。



生薬 ケツメイシ

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



中央アメリカ原産で、草丈1.5mにもなる大型の一年草です。葉は偶数羽状複葉で2-4対、倒卵形で長さ3-4cm、花は葉腋に双生し、黄色の蝶形花を咲かせます。果実は莢果で線形、長さ15-20cmに下向きに湾曲し、結実しても開裂することはありません。中に30-35粒、約5mmの斜方柱状、平均重32mg、光沢のある濃褐色の種子が1列に配列しています。第十七改正日本薬局方にはもう一種*C.tora*(コエビスグサ)が規定されています。こちらは熱帯アジア原産でインド、タイ、ベトナム、台湾、中国などに分布し、エビスグサによく似ていますが、草丈1m、小葉の長さ2-3cm、平均種子重16mgと全体に小形で、寒さに弱く国内では結実できず栽培は不可能です。

中国における決明の歴史は古く、『神農本草経』に「決名。青盲、目淫膚、赤白膜、目の充血と痛み、涙が止まらないものを治し、長く服すれば精光を益す」とあり、眼の疾患に用いることが記されています。李時珍(1518-93)は「馬蹄決明のことで、目を明かにする功力を表示した名称だ」と名の由来を述べています。蘇頌(1020-1101)は「現に所々の民家で畑に蒔いて栽培している。初夏に苗が生え、高さ三四尺、根は紫色を帯び、葉は首蓆(ウマゴヤシ*Medicago polymorpha*)に似て大きい。七月黄花を開いて角を結ぶ。子は青緑豆のようで鋭い。十月採取する」と言い、黄色花のマメ科植物であることは分かります。李時珍は「決明には二種ある。一種は馬蹄決明であって、茎の高さ三四尺、葉は首蓆より大きくして本が小さく、末が濶く、その葉は昼開いて夜合し、両両互いに合わさる。秋淡黄色で五出の花を開き、初生の細豆(ササゲ)のような長さ五六寸の角を結び、その角の中に数十粒の子が参差として相連り、馬蹄のような形を成している。色は青緑だ。眼目の薬に入れて最もよし」と記しています。これはコエビスグサの性状とよく合致しています。続いているもう一種の苳芒決明の説明は熱帯アジア原産で中国南部に自生するハブソウ(望江南*C.occidentalis*)の性状とよく一致しています。苳芒決明はほぼハブソウとみてよいのではと考えます。和名ハブソウは沖縄などに生息する毒蛇ハブに咬まれた時の治療薬として用いたことからと伝えられています。ハブ茶はこのハブソウから付いた名と思われそうですが、現在のハブ茶はエビスグサを用いています。

我が国においての記録は『本草和名』(918)が初出で「決明、陶弘景注に云う目を明らかにする故に明を以てす。和名衣比須久佐」と記され、中国の本草書からの記載と和名は「夷草」で異国の植物の意で名づけられたものと思われそうです。『延喜式』(927)の典薬寮、諸国進年料雑薬には武蔵国の二斗をはじめとして11ヶ国、計七斗三升が猷納されています。この頃は原植物は渡来しておらず、決明に似た植物としてカワラケツメイの種子が採取されていたのではとも考えられますが、詳しい記載はなくよくわかりません。江戸時代中期の『物類品隲』(1763)に「漢種、享保中、種子を伝えて、官園に植える」とあり、また小石川御薬園の記録に「享保六年丑九月より御預ヶ御薬種覚に決明子、一包(長崎より送付)」とあるところから、中央アメリカ原産で耐寒性があり、国内栽培が可能なエビスグサが渡来したのは享保年間(1716-1736)とされています。『本草綱目啓蒙』(1803)に「享保年中に渡りし漢種、今城州(山城国)、山城郷長池富野辺に多く栽え。子を取て薬舗に送る。春分に種を下し、苗高さ二三尺。葉互生す。初出る葉は四葉排生し、後に出る葉は六葉排生して一大葉をなす。蚕豆葉の如にして薄小なり。其六葉の内、末の二葉は長大なり、已下漸を以て小なり。夏月葉間に花を開く。五弁にして梅花の形の如し。深黄色、大さ錢の如し。花謝して角を結ぶ。長さ六七寸。小豆莢の如し。内子は赤小豆に似て、一頭尖り、斜にそぎたるが如し。黄褐色にして光りありて堅し。秋後苗根共に枯る」とあり、現在のエビスグサとよく合致します。(村上守一 記)